

# 戦前朝鮮における靖国神社遺児参拝

## 靖国遺児参拝 戦前と戦後の連続 4

松岡 勲

はじめに

一昨年一二月に行われた、韓国の翰林大学校日本学研究所の「靖国」に関するワークショップで、一九五〇年代の靖国神社遺児参拝について報告した。その時、パネラーの南相九（東北アジア歴史財団）さんより、「戦前朝鮮においても靖国神社遺児参拝があった。その件について、韓国では研究がなされていない。」という貴重な情報と示唆を頂いた。

その後、南さんから、韓国国立中央図書館の検索サイト<sup>1)</sup>に朝鮮の靖国遺児参拝の情報が一部掲載されていると教えて頂き、そこから、私の戦前朝鮮における靖国遺児参拝の調査が始まった。

### 一、第二次世界大戦中の靖国遺児参拝

一九五〇年代の靖国遺児参拝は、第二次世界大戦中の遺児参拝を踏襲していた。戦前の参拝は、恩賜財団軍人援護会が一九三九年から一九四三年まで毎年一回ずつ行った。それは全都道府県・海外植民地（台湾、朝鮮、満州、関東州、樺太等）に及び、総計一万八千人の戦没者遺児が靖国神社に集められた。

軍人援護会は一九三八年に皇室の下賜金によって作られた軍人援護の組織で、戦没者の遺族、傷痍軍人ならびに出動軍人の家族等に対する物心両面にわたる援護を行った。一九四三年の第五回参拝には、全国各地から四八五九名の遺児が参加した。一九四四年からは戦局の悪化と米軍の空襲の激化で靖国神社参拝事業は中止され、各都道府県の護国神社に場所が移された。各都道府県の軍人援護会は児童の参拝の感想文集『社頭の感激』（多くの県で同名のタイトル）を発行し、現在も文集が多く残っている。

第一回から第五回の参加遺児数については、斉藤利彦著『「嘗

<sup>1)</sup> 韓国中央図書館検索サイト <https://www.nl.go.kr/>

れの子」と戦争く愛国プロパガンダと子どもたち<sup>2)</sup>によると次のようになる。大量の戦没者遺児が靖国神社に動員され、皇国主義と軍国主義思想に染められた、一大プロパガンダだったことが分かる。

第一回（一九三九年）一三二四人（『高知県軍事援護誌』軍事援護会高知県支部）

第二回（一九四〇年）三一九一人（『社頭の感激』軍事援護会山口県支部）

第三回（一九四一年）三八二一人（『社頭の感激』軍事援護会茨城県支部）

第四回（一九四二年）五〇〇〇人を超える。（『朝日新聞』一九四二年三月二六日）

第五回（一九四三年）四八五九人（『写真週報』第七一号、一九四三年四月七日）

## 二、戦前朝鮮における靖国遺児参拝

<sup>2)</sup> 斉藤利彦著『「誉れの子」と戦争く愛国プロパガンダと子どもたち』（中央公論新社）

<sup>3)</sup> 立命館大学図書館（OICライブラリー）所蔵

京城日報（復刻版）（日本語）合本、韓国教育史文献研究院刊

<sup>4)</sup> 大阪府立図書館所蔵

大阪朝日新聞外地版（復刻版）のうち朝鮮版（日本語）合本、ゆまに書房刊

大阪毎日新聞外地版（復刻版）のうち朝鮮版（日本語）合本、ゆまに書房刊

戦前の朝鮮において、戦没者遺児の靖国神社遺児参拝はどのように行われたのか。韓国国立中央図書館のサイトに、戦前の朝鮮総督府の官報的役割だった「毎日新報」（言語は朝鮮語）があり、「毎日新報」の記事を歌手で俳優の趙博さんに翻訳してもらい、確認できた。この翻訳は資料として最後につける。（同サイトには「朝鮮時報」の遺児参拝記事も掲載されている。）また立命館大学図書館（OICライブラリー）に、これも総督府の機関紙であった「京城日報」（言語は日本語）<sup>3)</sup>、大阪府立図書館には「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」の「朝鮮版」（言語は日本語）がある<sup>4)</sup>。遺児参拝情報については塚崎昌之（立命館大学非常勤講師、日本近現代史）さんに大変お世話になった。以下はこれらの情報を整理した戦前朝鮮の靖国神社遺児参拝の実態である。

### 《朝鮮靖国神社遺児集団参拝》

当時日本の植民地であった朝鮮においても、一九三九年から一九四三年まで五回に渡って、日本人と朝鮮人の戦没者遺児の参加

の形で実施された。さらに一九四四年、一九四五年は戦局の悪化によって、京城護国神社（一九四三年一〇月創建）に戦没者遺児が参拝している。

関連する事項としては、朝鮮における徴兵制度の実施があり、朝鮮人兵士数は塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度について」<sup>5)</sup>によると次の通りである。後述の靖国参拝児童の戦死した父に軍属（徴用工）が出てくるので、これも含んで考えなければならない。

一九三八年「志願兵制度」実施 二万七千名

一九四四年「徴兵制度」実施 一九万名

\*二〇二一年四月に行われた、一五年戦争研究会で「子どもたちの靖国戦争後も『少国民』にされた戦争遺児たち」を報告したが、以下はその際の塚崎昌之さんのサブ報告<sup>6)</sup>も参考にした。

（概要）

- ・ 小学校五年生、六年生の戦没者遺児が対象。
- ・ 二重橋で宮城参拝、日比谷公会堂式典（厚生省・軍人援護会主催、皇后から「御汝菓」下賜）、靖国神社昇殿、遊就館見学、東京観光（明治神宮・宝物館・海軍館等）。
- ・ 朝鮮・台湾遺児は阪神観光（伊勢神宮・橿原神宮・桃山陵等）とセットだった。
- ・ 朝鮮人遺児と日本人遺児は一緒に参拝したが、玉串奉奠はいずれの年も日本人遺児によって行われた。

れ

#### ● 第一回 一九三九年

- ・ 一名のみ参加 日本人男子（田代勇、田代藤太郎伍長の息子、小学校六年生）

- ・ この年のみ八月参拝。七日に拓務相と面会。

〔新聞記事〕

「九段の対面に感激の上京 田代君健気に語る」（大阪朝

日南鮮版、八月五日）

「小磯拓（務）相から受けた恩情と感激の記念の色紙 九段の父に対面した田代少年の感激」（大阪毎日朝鮮版、八月八日）

「けふ遺児ら社頭の対面 御菓子伝達式に浅香宮殿下台臨 早くも御言葉賜ふ」（京城日報、八月六日）

#### ● 第二回 一九四〇年

- ・ この年から三月下旬に変更。
- ・ 八名（男子三名、女子五名）、内二名が朝鮮人少女（ともに本名）、父は軍属と憲兵補。
- ・ 出発前に京城神宮参拝後、総督府で南次郎総督が激励。
- ・ 参拝前に二重橋前で「皇国臣民の誓詞」を力強く叫ぶ。

<sup>5)</sup> 塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度について一、二」（日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』一五二号、一五三号）

<sup>6)</sup> 塚崎昌之「戦前期―靖国神社朝鮮遺児集団参拝の概要」「遺児靖国神社集団参拝…朝鮮人遺児コメント・作文」（二〇二一年四月四日、第二四四回一五年戦争研究会）

・参拝後に李王家邸を訪問。

・参拝参加者八名（朝鮮日報他各紙、二月一七日）

平壤若松小学校五年生故五ノ井淀之助少佐次男 五ノ井潔君

釜山第七小学校五年生故安武平三郎中尉長女 安武由江さん

大邱東雲小学校五年生故臼井道通中尉長男 玉木道實君

全羅南道勝湖里小学校五年生故佐藤満衛少尉長女佐藤清江さん

大田本町小学校五年生故安井鐘一上等兵長男 安井茂君

全北金堤小学校六年生故谷井弥吉伍長長女 谷井光子さん

忠北青徳小学校六年生故金永喆軍属次女 金貞淑さん

威北茂山南小学校六年生故李珍龍憲兵補三女 李姜姫さん

〈新聞記事〉

「上京の遺児部隊へ 総督さんが暖かい親心 亡き父に代わって激励」(大阪朝日南鮮版、三月二日)

「(楠木) 正行に劣らぬ忠義 お父さんにお誓ひ 慈父のようなやさしい総督の訓示、靖国の八遺児感激の旅へ」(大阪毎日朝鮮版、三月二三日)

「長旅の疲れ吹飛ば 社頭対面の喜び！ 入京した半島遺児代表」

(京城日報、三月二五日)

「九段の社頭感激の瞬間 御霊呼ぶ拍手 父よ、見てください。 遺児聖なる対面」(京城日報、三月二七日)

「李王妃殿下より有難きお言葉 光榮に八遺児感涙」

(大阪朝日南鮮版、三月二八日)

●第三回 一九四一年

・一三名（男子九名、女子四名）、内一名が朝鮮人少女（創氏改

名・康本光淑）、父の所属は不明。

・出発前に朝鮮神宮参拝、朝鮮軍司令部・総督府等を訪問

政務総覧が激励「(楠木) 正行の如くあれ」

・参拝前に拓務省訪問、拓務大臣が激励

〈新聞記事〉

「社頭対面に胸躍らせ 半島の遺児部隊東上」(大阪朝日南鮮版、三月二五日)

「秋田拓相に招かれ 自筆の色紙を貰ふ 社頭参拝前に喜びの遺児たち」

(大阪毎日南鮮版、三月二八日)

「日の丸の旗に埋もれて出征したあの時の姿を追憶 お父さんくうるむ瞳 遺児部隊九段に社頭対面」(大阪朝日南鮮版、三月二九日)

「感激に胸轟かせて 英霊と聖なる対面 靖国の遺児・けふ晴れの参拝」

(京城日報夕刊、三月二九日)

●第四回 一九四二年

・一行は一四名（写真で確認）。名前が分かるのが一〇名で、その内訳が男子七名（一名 朝鮮人）、女子三名になる。残りの四名は名字のみ分かる者（名字だけでは性別不明）が一名、全くわからない者が三名。写真を見ると、男子七名、女子七名なので、不明者の四は全員女子。内一名が朝鮮人男子（創氏改名・三山泰乙、父は軍属で通訳）。

・出発前に朝鮮神宮参拝、朝鮮軍司令部・総督府等訪問。朝鮮軍司令部・政務次官が激励。

・参拝前に全遺児、皇居前広場に集合、朝鮮部隊は楠木正成像前

で小憩、その後二重橋正面へ、前を馬上の東條英機が会釈して通過という演出、その後天皇が二重橋に姿を現す。

・参拝後の李王家邸を訪問、夫妻参列、李王が言葉をかけ、茶菓などを与える。

〈新聞記事〉

「父在す靖国の杜へ 遺児部隊第一陣東上す」(大阪朝日南鮮版、三月二五日)

「お懐かしのお父様 社頭対面に感激の朝鮮遺児部隊」

(大阪朝日北鮮版、三月二五日)

「長途の疲れも忘れ 目をかがやかせて 誉れの部隊入京」

(大阪毎日南鮮版、三月二六日)

「皇后陛下 靖国の遺児に御紋菓下賜」(京城日報、三月二六日)

二六日)

「“遠路よく(う)こそ” 拓務省で勳児を招待」(大阪毎日朝鮮版、三月二七日)

「二重橋に龍顔を拝す 竜眼を誉れの半島遺児ら感涙」(京城日報夕刊、三月二八日)

「人情首相と少年」(京城日報、三月三一日)

●第五回 一九四三年

・九名(男子五名、女子四名)、内一名が朝鮮人男子(本名・蔡奎範)、父は憲兵補。

・出発前に朝鮮神宮参拝、総督府等を訪問。

〈新聞記事〉

お父さんに負けるな 板垣司令官 “勳児”を激励(大阪毎日南鮮版、三月二三日)

『お父様来ました。』遺児ら九段の杜で背伸び(大阪朝

日西鮮版、三月二七日)

「この荣誉を忘れるな 本庄軍司保護院総裁の訓話」(大阪朝日、三月二八日)

「今ぞ幽明相見ゆ勳の “父と子” “ああお父さんだ!”

祈る姿もいぢらしい “神の子” 勳児部隊昇殿参拝」

(大阪毎日、三月二八日)

●一九四四年、一九四五年 京城護国神社に参拝

〈新聞記事〉

「靖国遺児上京参拝中止 今春は各地方にて執行」(毎日新報、一九四四年三月八日)

「二七日に昇殿参拝 誉れの遺児京城に集まる」

(大阪朝日中鮮版一九四四年三月二七日)

「感激にお土産抱え 誉れの遺児京城にお別れ」(京城日報、一九四四年三月三〇日)

「靖国遺児たち昇殿参拝 お父さん、私がおこへ参りました 二七日京城護国神にて無言の対面」(毎日新報、一九四五年三月二〇日)

《戦中朝鮮靖国遺児参拝：日本人・朝鮮人コメント・作文》

◎第一回 一九三九年八月

▽田代勇 慶尚南道 小学校六年生 故田代藤太郎伍長

「父の英霊と靖国神社で対面できるのはこの上もない歓びであり、おとうさんもさだめし喜んで下さると思います。私は立

派な軍人となりお父さんの志をつぎお国のために尽くしたいと思っています。」(大阪朝日南鮮版 八月五日)

◎第二回 一九四〇年三月

▽五ノ井清 平壤若松小学校五年生 父五ノ井淀之助少佐

「家名を重んじてお父様の如く軍人となって御国のために働きます。お父さんどうか私をいつまでも守ってください。」(大阪毎日朝鮮版、三月二七日)

▽安武由江 釜山第七小学校五年生故安武平三郎中尉

「お父さんと靖国神社でお会いする日をお母さんと毎日指折り数えて待っています。お父さんに会ったらお父さんが戦地にゆかれてからの色々なことを皆お話して聞かせるのです。お父さんもどんなに喜ぶでしょう。」(大阪朝日南鮮版、二月九日)

▽金貞淑 咸鏡北道清津府清徳小学校六年生 父軍属・一九三

九年一月一四日 死亡。

「私が十一の時に、お父さんは戦争に行きました。優しく元気なお父さんでした。父が亡くなつたと聞かされた時は随分泣きましたが、もうすぐお逢ひ出来るのだと思ふと大変嬉しいです。」(京城日報、三月二二日)

▽李善姬 咸鏡北道茂川郡茂山南小学校六年生 父一等憲兵補

・一九三三年八月一七日死亡

「父は私が小さい時から御国のために働いておまして、余りお家にゐませんでしたので、よく判らないのです。お母さんがとても元気で私を可愛がつてくれますので少しも淋しくはありません。靖国神社にお参りしたらお母さんの分も一緒に拜んで来る積りです。」(京城日報、三月二二日)

▽金貞淑・李善姬

「私達は嬉しさと幸福で一ぱいですが、朝鮮を出発して今まで皆さまの御好意は涙ぐましいばかりで感謝の言葉はありません、これも皆お父さんのお蔭です、お父さまは私たちを一ぱん可愛がつて下さったのです、私は今日参拝して「お父さま御安心下さい、私は女学校にも入学しました、今からはお母さんに孝行して仲よく暮して行きます。お友だちも皆さんもとても可愛がつて下さいます」と奉告しました。けふの感激は永遠に忘れられません」(大阪毎日朝鮮版、三月二七日)

◎第三回 一九四一年

▽西垣武雄 公立尋常小学校五年生、陸軍一等兵父故西垣亮。

「僕のお父さんはいいお父さんでした。お父さんのことはみんな憶えてゐます。軍服姿の立派だったこと、出征するときの美しかったこと、昨日のことみたいに憶えてゐます。」(京城日報、三月二四日)

▽康本光淑 平安北道公立尋常小学校六年生 平壤西門高等女学校入学。

「一日も早くお父さんにお会ひして光淑の元気でゐることを喜んでいただきたいと思ひます」(大阪朝日南鮮版、三月二六日)

「待ちに待った社頭対面の二十八日は今日です、手を淨め口をすゞぎ静かに昇殿しました。お父さんのいらつしやる所ろだと思つて胸がどきどきして来ました。私は□かに黙禱して『お父さんきつと偉くなつてお国のために尽します、私が男に生まれなかつたのを残念ですが女でも立派になつてお国の

ために尽します、さうしてお父さんやお母さんを安心させます』と申上げるとお父さんは、にこにこ笑顔を見せ□□ながら『しつかりやりなさい、お父さんは□□(靖国?) □□つてゐる』と仰有るやうな気がしました』(毎日新報夕刊、三月三一日)

◎第四回 一九四二年

▽五ノ井和夫 五ノ井少佐遺児

「一昨年は兄さんが来ました。今年は僕です。お父さんも、さぞ喜んでゐてくださるでせう。靖国神社参拝の時はお父さんに負けない立派な軍人になりますと拝むつもりです。」(京城日報夕刊、三月二六日)

▽青木秀子 青木少佐遺児

「家を出る時、お母さんが靖国神社でお父さんにお会いしたら一生懸命勉強して立派な人になりますと、申し上げなさいと言われてきました。早く明後日(参拜日)になればよいと待ち遠しくなりません。」(京城日報夕刊、三月二六日)

▽三山泰乙 父趙奎善・通訳・一九三九年「北支」で死亡。

「僕のお父さんは通訳として出征しましたが、昭和十四年北支で戦死しました。僕はお父さんのやうに立派な皇国臣民になつて日本のために尽す覚悟です。」

(京城日報夕刊、三月二六日)

「私は遠く朝鮮から靖国神社まで呼んで下さつた大臣様や大將様にお礼をいひたい気持で一パイです。今日皇后陛下からお菓子を戴いたのも皆お父さんが日本のために尽したからです。僕も明日靖国神社へ行つたら、きつと立派な日本人になります」と誓ひます(毎日新報、三月二三日)

同じ紙面に「お父さん安心して下さい」という見出しがついた長い文があるが、活字がつぶれてほとんど読めない。ただ別の記事に当時の植民地朝鮮の状況がうかがえる「童謡」が載っていたので紹介する。(毎日新報、三月二三日)

童謡「ばんざーい」 ナム・テウ(訳 趙博)

母さんが両手を上げて

『バンザーイ』すれば

赤ちゃんも両手を上げて

『うー』と言ひ

父さんが両手を上げて

『バンザーイ』すれば

赤ちゃんも両手を上げて

『うー』と言ひ

赤ちゃんの『バンザイ』は

『うー』が『バンザイ』

◎第五回 一九四三年

▽村上辰巳、好巳兄弟 熊本県八代郡宮原国民学校五年生。

「確かに父上の声 双生児の遺児」「父巳義伍長を中支の戦線で失ってから五年、その時八歳の頑足ない幼児であった兄弟はいま見事に成長して郷里で母きよのさん(三六)を助けて農業の手助けをしている。」

兄辰巳より『私たちはこんなに大きくなりました。お母さんのいはれることをよくきいて勉強したり体鍛えたりしています。どうか安心してください。』と報告上げました。奥の方でお父様の喜ばれる声が確かに聞こえました。」

弟好巳より「靖国神社で頭をちつと下げて拜んでゐますと、父が『好巳、よく来た、家はみんな元気に暮らしてゐるか』と神殿の奥から声をかけて下さいました。私は『みな元気です』と答えました。(後略)」（朝日新聞南鮮版、三月三〇日）

▽蔡奎範 父一等憲兵補

「兄さんが中学に行くやうになり、また弟が国民学校へ今年から入ることになりました、その他お母さんをはじめ皆一同元気ですと御報告申し上げます。」

(朝日新聞中鮮版、三月二五日)

「お父さんが立派な勲章を戴きこんな立派なお社に祀られただけでも家中で喜んでゐます。このたびは畏くも皇

后陛下から御下賜品を又朝香宮殿下から尊いお言葉を戴き思はず涙が出ました、只今お父さんにこのことをしつかり御報告して立派な皇国臣民になるとお誓ひして来ました。」(京城日報夕刊、三月二八日)

「この感激は言葉にも紙にも現すことが出来ません、忠君愛国を實踐するのみです。」

(朝日新聞中鮮版、三月二八日)

おわりに

朝鮮における靖国遺児参拝を調べて、遺児参拝は朝鮮人の遺児にとつて大変残酷なことであつたろうと思つた。戦前の場合、対象は国民学校五、六年生である。私の体験から言つて、その時点では日本国家が遺児参拝に何を狙っているかが分からなかつたとしても、後年その政治的意図を認識できた時、まして被征服民族で父を戦争で殺された訳であるから、その屈辱感、怒りはどれだけ大きいか、想像してあまりある。植民地朝鮮で展開された靖国遺児参拝の酷薄さを痛感した。

以上、戦前朝鮮の靖国神社遺児参拝について、事実関係を追つてきたが、今後の課題についていくつか上げる。戦前遺児参拝を組織した恩賜財団軍人援護会が植民地、特に朝鮮に対してどのように考え、どのような方針で臨んだのかを調べたい。また朝鮮総督府が遺児参拝にどう関わつたのかを調査して明らかにしたい。さらに、遺児参拝体験者の人数が少なく、高齢(九〇歳を越える)

であり、これはなかなか難しいが、韓国研究者のご協力を仰ぎ、朝鮮の遺児参拝体験者を探すことを追求し、聞き取りができたらと考えている。

最後に、朝鮮遺児の靖国神社参拝の感想文、新聞のインタビューを読んで、非常に気になったことは朝鮮植民地時代の学校での日本語の強制だった。当時の子どもたちがどの程度日本語が話せ、書けたのか。学校での日本語の強制の実態、強制に対しての子どもや親の抵抗の実態について、この領域は先行研究の蓄積があるので、詳しく知りたいと思った。

### 《資料・『毎日新報』靖国遺児参拝記事》

翻訳 趙博

《『毎日新報』昭和十八年三月二八日》

皇后陛下御下賜品

靖国遺児たちに伝達式 厳粛に挙行

【東京電話】靖国神社の社殿に於いて、我が父・我が兄の忠魂と対面する遺児たちの光栄なる日―畏れ多くも皇后陛下の御下賜品

伝達式と、朝香総裁宮殿下のご後援を受けた軍人援護会『第五回遺児靖国神社参拜式典』は、第五回『遺児の日』の初日午前一〇時三〇分と午後一時三〇分の二回に分けて、東京日比谷公会堂にて厳守にも盛大に挙行された。同日午前に挙行された第一回式典では、朝鮮の二六各道府県から参詣した遺児部隊をはじめ、東条陸軍大臣、小泉厚生大臣、奈良軍人援護会長らが列席するなか『皇后陛下御下賜品伝達式』が午前一〇時半に開式した。

まず宮城遙拝をした後、陸軍戸山学校軍楽隊の伴奏で国歌斉唱、『海ゆかば』を吹奏した後、小泉厚生大臣から御下賜品を伝達する旨の辞が述べられ、続いて、賜ったお菓子が小泉大臣の手から遺児代表・小松眞一（福島県）君に渡された。この時、満場いっぱい遺児たちの清らかな両眼は、言葉にならない感激で輝いた。続いて、小泉厚生大臣、東条陸軍大臣、島田海軍大臣、本庄軍事保護院総裁から順に温情に満ちた激励のお言葉を賜り、光栄に胸躍らせる遺児たちを代表して小松君が力強く答辞を述べた。伝達式が終わり、続いて午後一時から軍人援護会『第五回遺児靖国神社参拜式典』に入った。

朝田総裁宮閣下には、奈良会長以下軍人援護会会員の奉迎のもと会場に入場された。そして、国歌斉唱のあと畏れ多くも総裁宮閣下におかれては全遺児たちに対して「君たちの元気な顔を見て嬉しい。畏れ多くも皇后陛下の御下賜品をいただいて、皇恩の有り難さに感激したことと信じる。このような喜びを賜るのは、ひとえに君たち全員の父君が天皇陛下のために命を捧げたおかげである。君たちも、皇恩に奉応たてまつり、あらゆる困難を克服し、大東亜戦争を勝ち抜かねばならない」との、有り難いお言葉を述べられた。遺児代表・小柳安彦（福岡市高宮国民学校五年生）君

は感激に満ちた言葉で奉答し、奈良会長の挨拶のあと同会長の発声で聖寿万歳を奉唱して一同敬礼、殿下にはご退場、一旦ご帰還なされた。この二つの式典は午前十一時に終わり、全てが終了した。

そして、午前の式典に参列した遺児部隊は昼食を終えて解散、朝鮮、台湾、樺太、関東州、北海道、沖縄、鹿児島、長崎、宮崎、大分、青森、熊本の一三支部だけが貸し切り列車で九段へと向かい、午後一時三〇分から順次、待ちに待った昇殿参拝を行った。一方、東宝劇場で午前を過ぎ、山形以下二六支部の遺児たちは、昼食を終えた後に徒歩で日比谷公会堂へ赴いて、午後一時三〇分から午前とは異なる両式典に参列し、御下賜品伝達式の代表は永田喜也（大阪階行社学園五年生）君が、援護会式典の代表は田崎貞夫（秋田県袖北部峯吉川国民学校五年生）君が、それぞれ答辞と奉答を述べた。

#### 本庄総裁訓話

【東京電話】本庄軍事保護員総裁は二七日、遺児部隊に対する皇后陛下御下賜品伝達式において、次のような訓話をされた。

皆さんが今から靖国神社に参拝して、神となられた父君を参拝することは大きな喜びであると考えます。皇室におかれては常に皇国の花と散られた勇士の体に深く思いを致されて、様々なご慈愛を賜られ、皇后陛下におかれてはこの度特にお菓子を御下賜く

ださいました。このようにしてくださった私にとっても、皆さんにとっても、共々畏れ多い喜びであります。皆さんは今から靖国神社に参拝して神殿で、広大なる皇恩を賜った者として父君の前で、全心全力で勉学に励み立派な国民となって必ず父君の遺志を継いで参ります、と誓うならば、父君も、真の護国の勇士の息子だと満足され、皆さんの将来に揺るぎない〇〇〇〇（判読不可）。徹底して戦い勝利して、皆さんの父君にお見せしなければなりません。お母さんの教えをよく守り、兄弟仲良く過ごし、体と心を凛々しく保って立派な国民となり、一般の模範にならねばなりません。そうしてこそ、広大無辺の皇恩に対して万分の一なりともお返しが出来るのです。それが、正義のために命を捧げられた皆さんの父君への最大の親孝行になると信じております。

#### 小泉厚相訓話

【東京電話】小泉厚生大臣は二七日皇后陛下の御下賜品伝達式で、遺児たちの畏れ多い光栄に、次のように訓話をなされた。

畏れ多くも皇后陛下におかれましては、皆さんが靖国神社に参拝するに際して菓子をくださいました。広大無辺の皇恩に畏れ多くも感激の極みであります。英霊は神として合祀せよとの命によって天皇陛下の治配に浴することになるのは、実に畏れ多いことであります。日本人としてこれ以上の大きな光栄はありません。皆さんも、亡くなられた父君の遺志を継いで、成長した暁にはお

国の為により大きな働きをなさることを望みます。これから戦争が何年続こうとも、いかなる艱難が降りかかろうとも、この大東亜戦争を闘い抜き、戦争の目的を達成しなければなりません。皆さんは今日の光栄と感激を胸に深く刻んで、祖父母と母君に孝行して、兄弟仲良く、勉学に励み、心身を鍛えてください。靖国の神の息子として恥ずかしくない立派な日本人になって、御国の為尽力されることと信じております。

目に浮かぶ父の姿

遺児たち感激の対面

靖国神社昇殿参拝の第一日

【東京電話】三月二七日は、全国の遺児にとっては生涯忘れられない感激の日である。遠くは関東州から、北は樺太、南は沖縄から上京し、式典に参列した名誉ある遺児たちの中に朝鮮、台湾、樺太、関東州、満州、北海道、沖縄、鹿児島、宮崎、大分、青森、熊本遺児部隊一三三六名は、午後一時に厚生省の式典と軍人援護会の式典を終えて、すぐさま日比谷から貸し切りの市電一二台に乗って九段下で降り、この感激と歓喜に満ちた胸を躍らせながら大鳥居をくぐり、護国の誓い固く父・兄と感激の対面をした。午後一時半には、朝鮮、台湾、樺太、関東州、満州各支部の一団がまず昇殿参拝した。男女の代表各一名が玉串奉呈するのに合わ

せて、社殿の前に頭を垂れて礼拝する遺児六四名一人一人の胸を満たす限り喜びに打ち震えながら「お父さん、私はこのように大きくなりました。毎日お母さんと一緒に一生懸命いて勉強しています。良い人間になる日を待っていてください」と、心から父に力強く呼び掛ける遺児たちの目には慈愛に満ちた父の影が去来して見えた。参拝を終えて各支部ごとに神門前で記念写真を撮り、遊就館と国防館を見学した後、白百合高等女学校の教室に同校生徒約五〇名の奉仕で、各方面から限らない感謝の愛情溢れる記念品を受け取り、感激的な社殿対面の一日を過ごした。

勇気を出して戦っていこう

東条首相が後世に託す訓話

【南京電話】東条首相は二七日午前一時からの靖国神社参拝記念式典で、大勢の遺児たちに対して次のような温情溢れる訓話をされた。

皆さんは今、感謝に満ちた光栄に、凶らずも深い感激を禁じ得ないと思います。この光栄は、天皇陛下が、皆さんの父君が果たされた忠義を賞賛されたことと同時に、皆さんもまた、父君に負けないように御国のために力を尽くしなさいと畏れ多くも命じられたのであると拝察するのであります。ご存じのように、

日本は今歴史上未曾有の大戦争中ですが、一般国民も軍人として、最前線で、また銃後の一人の人間として、国内において各々が天皇陛下のもとで心と力を一つに集めて鉄の塊のようになり敵米英に勝つために各層各業に従事しているのです。

この戦争は、大人だけが戦って簡単に結末になる容易い戦いではありません。少国民である皆さんが、米英の少国民より遥かに固い精神力を鍛錬して健全な精神を作り、立派な知徳をしつかりと持ち、国を背負って戦ってこそ、勝利できるのです。皆さんの頭にしっかりと刻んで欲しいことは、第一に皆さんの父君とその家族がどれほど多くの恩恵を皇室から受けているかと言うことと、第二に靖国神社の護国の神になられた皆さんの父君が、いつも皆さんの立派な成長を神社の中で見守っていてくださると言うことです。皆さんが熱心に勉強している間、寂しいとき、あるいは、自分思い通りに事が進まず心が傷ついたときも、必ず靖国神社にいらっしゃる父君の御霊に思いを馳せてください。すると、慈愛深い目で諸君を見守ってくださる父君が出てきてくださることでしよう。そして、諸君の心の中に必ずや勇気が湧いてきて、寂しさと落胆も消えてゆくことでしよう。皆さんもよく知っている「ビルマ」空中戦で壮絶な戦死を遂げた加藤少尉も、父君が日露戦争で戦死なさいましたし、その他にも、今大戦で御国のために輝かしい武勲を立てた方々の中には幼い頃に父君が戦死なされた気の毒な人も多いのです。この人たちが、このように良い人になれたのも、今、私が言った三つのことを胸深く刻んで、父親が

いなくても、また、母親がいない場合も、少しも臆することなく熱心に勉強した結果だと信じてください。諸君も心一つにすればこのような良い人になれるのですから、いつも先生の教えをよく聞いて、熱心に勉強して、お母さんの言いつけをしつかり守り、これからも日本を双肩に担う良い日本人にならねばなりません。

#### 尽忠報国の決意

英霊の後継者たちの強固たる覚悟

【東京電話】南は沖繩、また北方は樺太から、我が父・我が兄が眠っている帝都東京の空を眺める全国の遺児四八九〇名幼い胸は、靖国神社を脳裏に描きつつどれほどこの日を待ったことか。

『第五回遺児の日』は、二七日を初日に二九日まで三日間、畏れ多くも御下賜品を下さり給いし皇后陛下の皇恩のもと、軍人援護会を中心に帝都全市民の赤誠を込めて意義深く展開されることとなった。この日の朝、市内五〇余箇所各宿舎を出た遺児部隊は、午前八時三七分全員が宮城前に次々と姿を見せ始め、宮城を奉拝する全遺児は英霊の後継者としての誇りを可愛い顔に表し、両の瞳を輝かせながら、援護会会長奈良大将の発声で慶寿万歳を叫ぶ尽忠報国の決意も固く、お父さん、お兄さんお聞きくださいとばかりに声を張り上げて唱すると、大内山に鈺が静かに響いた。そして、全遺児五二支部は二手に分かれて、朝鮮以下二六支部は式



温情首相の慈愛

満州梁川敏子嬢の扶助料を周旋

【東京支社電話】満州遺児部隊のただ一人の半島出身遺児と、情け深い東条首相との間に軍国美談が生まれた。

忠勲の遺児たちが父親と社頭対面をした二七日前日の二六日午後二時、首相官邸を訪れた満州遺児部隊とまみえた東条首相は、遺児たちの頭を一人一人撫でながら『お母さんはお元気ですか、お兄さんたちも勇ましく仕事をしておられますか』などと温かい言葉をかけられた。そして、海軍服を着た少女の前で立ち止まり、腰をかがめて何か熱心に訊いた。

『扶助料はもらってますか』と言うと

『……』

少女が首を左右に振るや

『ほー、これは全くいけないことだ』

と首相は、すぐさま困り果てた表情になった。この少女は梁川敏子嬢と言い、昭和一年父・梁川晚錫通訳官が戦死されて、母親は父親に先んじて昭和九年亡くなり、たった一人の幼い弟（国民学校五年）と共に祖母の手で育てられた少女で、哈爾濱高女二年に在学中である。

東条首相は『扶助料が届いていないのなら、どうなることやら。遺児の数が多いにも多いから、こういう失敗もあるのだと思う。ただの一人でも〇〇〇、話にならない。私がすぐに調査して送るようになります』と敏子さんに約束すると、一同は感激した。

『毎日新報』昭和一九年三月八日

靖国遺児上京参拝中止

今春は各地方にて執行

【東京支社電話】毎年『さくら』咲く四月を期して行われる靖国神社臨時大祭への遺児参拝は今年の春で六回目を迎えるが、主催者側の軍人援護会では戦局が益々重大になりつつあることに鑑みて、遺児たちの上京参拝を中止し、代えて、来たる二七日各地方の軍人援護会支部が主催し、各地で靖国神社参拝と変わらない厳粛で荘厳な式典を執行するように決定した。同日九時を期して宮城遙拝をした後、軍人援護会支部の式典の後に護国神社参拝を行うが、この式典は、まず援護会長の告辞を代読し、支部長の献辞、遺児代表の答辞で終わることになる。また、援護会支部管内に護国神社が所轄されている地方では道庁所在地の護国神社に参拝し、護国神社がない地方では学校や郡庁など適した場所に祭場を設置して、京城その他の支部でもこのような式典として、同日を厳粛に迎えることとする。なお、遺児たちの靖国神社昇殿参拝は昭和一四年夏から始まり、参拝者は各々、国民学校五六余名、高等科一二余名、中等学校一二余名が一五、六歳未満の児童数で、

今年の遺児数は六四五六である。

|||||

して榮譽の遺児たちを激励する。続いて、午前一時半から護国神社にて昇殿参拝する。

『毎日新報』昭和二〇年三月二〇日)

靖国遺児たち昇殿参拝

お父さん、私がここへ参りました

二七日京城護国神社にて無言の対面

毎年一度、新祭神の遺児たちが靖国神社に参拝していた意義深い行事が今年も中止されたことから、この参拝行事への参列が決まっていた朝鮮関係二七人の遺児たちは、二七日京城護国神社に昇殿参拝し、新祭神として祀られる父と無言の対面をすることとなった。遺児達は二五日に京城に集まり、二八日までの四日間明治町一丁目の愛国寮で宿泊し、様々な意義深い行事に参加する予定。二七日午前九時半からは、総督府第一会議室にて開かれる遺児に対する御下賜品の伝達式に参列するが、この式の前に、阿部総督、板垣朝鮮軍管区司令官、江藤政務総監以下軍関係者も参列

一 軍人援護会本部にて有志家の記念寄付を受け付けます。一

この行事の主催者である軍人援護会朝鮮本部では、遺児たちを真に歓待しようと準備中で、遺児たちを慰問激励し、同時に未永く遺児達が記念品として所持できる品物があれば民間からの寄贈も募っている。志ある人は、総督府社会課に申請されたし。

|||||